

大学出版

2002.12 No.55

冬

ブルースの四季——冬 ■ 湯川新 ——表2

特集* 大学出版の環境変化と対応戦略

大学出版の環境変化とその対応を考える ■ 小林敏 ——2

本格化する大学の競争と大学出版 ■ 後藤健介 ——6

変革期の学術出版とオンライン ■ 笹岡五郎 ——10

考察・日韓中大学出版部の電子出版への取組み ■ 中村晃司 ——14

科学する目8 一緒に暮らしたい動物 ■ 青木淳一 ——18

歩く・見る・聞く 知のネットワーク 28 ソウル「国立中央博物館」 ——20

大学出版部ニュース ——22

製作の現場から 30 ——32

デジタル出版最前線 8 ——表3

大学と社会を結ぶ知のネットワーク



大学出版部協会

ブルースの四季

・湯川 新・

冬

最も憂鬱な 季節



一九二〇年代と三〇年代のカントリー・ブルースの歌詞に一番登場する季節は冬である。旅鳥のブルースマンは、金なし、知人なし、恋人なしの場合、どこで寝るかという難題に逢着させられた。南部のミシシッピ州にいれば、冬の平均気温も摂氏一二度から一三度の土地柄であるから、好天であれば野宿も不可能ではない。が、雨が降り風が吹く日はどうしたのか。北部のシカゴやニューヨークでは一月、二月にもなると零下にまで下がるから、寝る場所の確保は命とかかわった。ついでにいる者は、三世帯が八時間交代で眠る賃貸アパートのホット・ベッドに潜り込めたであろう。車の中や橋の下や軒先で着のみ着のまま、新聞紙を毛布代わりにして、寒さをしのいだ者もいたし、凍死した者もいた。冬がやってくるのに、一着のスーツも持っていない／財布は空っぽ、どうしようか（バーベキュー・ボブ）。おまえに追い出されて、病気になるつまつた／俺は氷と雪のなかで野宿する貧乏人だ（ヘンリー・タウンゼント）。

冬の災禍は、毎年、家なき民の場合、確実に訪れてくるが、ブルースの詩句においては、それ自体として主題化されるというよりは、自分をないがしろにした恋人への恨みつらみ、貧乏の悲哀、病気の苦痛、未知の土地での孤独と暖かい故郷への懐旧を表すスタンザと並列して登場してくる。冬とは、災禍が二重、

三重にふりかかってくる受難の季節なのである。とはいえ、恋人に見捨てられるのも、貧しいことも、病気で死ぬことも、冬の出来事とは限らないとすれば、受難が重なるのは、現実の問題であると共に修辭上の工夫ではあるまいか。ある意味ではそのとおりである。

この時期の歌手たちの大半は、自分で書いた歌詞や曲を歌うわけではなく、彼らに共有の常套句を手がかりにしてスタンザを即興的に作り上げる。そこに登場した語の脚韻を踏まえて、また別な常套句に依拠して次のスタンザを発語する。したがって、同一のスタンザが異なる歌手の歌に頻出するし、同一の歌手の異なる歌にも、同一のスタンザが登場する。冬の歌もその例にもれない。冬景色を連想させる語句を除けば、とりたてて冬の歌とはいえないところもある。だが、死の危険をはらむ季節を表す常套句に、他のトラブルの常套句を重ねることで自分の抱え込んだトラブルのリアリティが高められる。冬が好んで歌われたのもそのためであろう。無論、冬の災禍はブルースマンのみが被ったものではない。ブルース歌謡の主語は、必ず「私」で、歌手の「私」が直面したトラブルを語るという設定になつてはいるが、常套句に依拠している以上、自己体験とは限らない。南部から北部へ移住した、或いは、移住の最中にあつた膨大な黒人層の「私」が抱え込んだ災禍の投影なのである。（ゆかわ・あらた／音楽社会学者）

特集

大学出版の 環境変化と 対応戦略

日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナーの成果

日本の大学出版部協会は、韓国・中国の各大学出版部協会と三カ国合同のセミナーを毎年行っています。二〇〇二年はその第六回目、韓国のソウル大学でひらかれました。

大学とはもともと国際的なものだといえます。学問に国境はないからです。日本の大学出版部協会は、国際交流を協会の重要な機能として位置づけてきました。特に、地理的に近く、また文化的背景にも共通するものが多い韓国と中国の大学出版部とは、実際に人と人が顔をあわせ直接討論することで、年一回の行事にとどまらない、東アジアの学術出版ネットワークを作りつつあります。

しかし、言語・文化、経済状況、そして大学に見られる各国の違いゆえに、毎年のセミナーは私たちに共通理解をもたらしながら、次々と課題をなげかけもします。今回の特集では、今回の三カ国セミナーでの議論を紹介しながら、学術出版の国際交流の、現時点での成果と課題を考えてみたいと思います。

大学出版の環境変化とその対応を考える

小林 敏

(慶應義塾大学出版会)

「情報提供の方法は変化している。そのような中で三カ国の大学出版部が話し合いを持つ意義は大きい。」

これは、「第六回 日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー」でのソウル大学校・鄭雲燦総長の言葉である。テクノロジーの進化は、私たちの生活に物的・時間的・空間的な余裕を派生させるという意味では歓迎の意をもって受け止められることが多い。

しかし、人間の生活は、物的・時間的・空間的な効率のみに支配されているわけではない。そこには、人間が人間として生活するのに必要な思想・良心の自由、表現の自由に基づいた精神的自由権の営みがある。いかにデジタル化が進もうとも、他人の権利を侵害してまで物的・時間的・空間的な利益を享受することは許されるべきではない。デジタル化の時代では、時としてこの自明の観念が歪められる。従来、情報というものは、何らかの送り手のプロの存在を経て社会に送られることが一般的であった。それに対

しデジタル化の時代は、誰でも、いつでも、どこからでも、情報を社会に向けて送ることを可能にした。この点については、出版業界の中に情報の送り手としてのプロとアマチュアの並立を許容せざるをえない、という見解がある。いわゆるアマチュアが情報の送り手となる場合、当然のことながら著作権未確認の編集著作物を社会に向けて発信することが多くなることはいうをまたない。いきおい社会風潮の中に権利意識が高まり、法的な紛争解決の機会が多くなるのは首肯し得るところである。一方、このような時代にプロがプロであるための証明を持ち続けることもたやすいことではない。今、デジタル化の情報提供と社会正義の問題は国際的な視野の中で考えることが不可欠とされてきている。著作権保護の問題一つをとっても三方国で話し合えることはたくさんあるはずだ。私は、耳に当てたレシーバーの奥から聞こえてくる同時通訳の早口で乾いた口調を聞きながら、そのようなことを考えていた。

第六回 日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー 派遣団

二〇〇二年八月二四日午前九時二〇分、私たちを乗せたJAL九八三便は名古屋空港をソウルに向けて飛び立った。今回の訪韓団は、渡辺勲大学出版部協会幹事長（東京大学出版会）を団長として、山本俊明協会副幹事長（聖学院大学出版会）と市川昭夫協会副幹事長（法政大学出版局）が両副団長、三浦邦宏協会総務担当幹事（明星大学出版部）が秘書長、三浦義博氏（東海大学出版会）、笹岡五郎氏（専修大学出版局）の両協会国際担当幹事が国際担当役員を務める構成をとり、以下、玉川常信氏（麗澤大学出版会）、高野修司氏（玉川大学出版部）、折橋正虎氏（中央大学出版部）、中村晃司氏（東海大学出版会）、後藤健介氏（東京大学出版会）、依田浩司氏（東京大学出版会）、植村八潮氏（東京電機大学出版局）、佐野雄治氏（名古屋大学出版会）、古澤言太氏（九州大学出版会）、そして、私、小林敏（慶應義塾大学出版会）の合計一六名で編成された。今回の「第六回」は共通主題による「継続討議」が各国主導で一巡する会議である。その意味で私たちは、今回の会議の出来が今後の日本・韓国・中国の国際会議のあり方を大きく左右することを意識しながらの韓国入りとなった。

国際会議、日本側発表の絶妙

「第六回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー」

は、「継続討議」の形態を確実に継承する形で進化した。そもそも「継続討議」は、私たち日本側が「第四回琵琶湖セミナー」で提唱した会議形態である。この会議形態は、「第五回上海セミナー」で国家や立場を超越したフリートークキングという副産物を引き出した。公式発言の形式性を重んじる国際会議としては、予想を上回る飛躍的な歩みよりが実現したのである。そして、今回の「第六回ソウルセミナー」を迎えた。私たちは、一年間の準備期間を経て今回に臨んだ。

まず、共通主題の発表に対しては、日本側は後藤健介氏（東京大学出版会）にその重責を託した。氏は、「日本における国立大学制度の変化と大学出版——東京大学と東京大学出版会の事例から」と題して論を進め、「日本において本格化する国立大学の再編」および「大学改革と大学出版の方向性」について言及する中から一つの重要な問題を提起した。それは「(大学出版部には) 大学や研究者の出版意欲をより公共的な言説空間に開き、市場に開くようにコーディネートする編集が求められてくるのではないか」ということであった。三カ国の大学出版部が今後必ず直面するであろう問題として重要な視点を含んでいると思う。

次に、分科会の領域では、第一分科会で笹岡五郎氏（専修大学出版局）が「変革期の学術出版とオンライン」と題する論を展開し、第二分科会で中村晃司氏（東海大学出版会）が「日本の大学出版部と電子出版」と題する論文を発

表した。笹岡氏はこの発表で日本の出版データを基礎資料に据えながら現状の出版流通の問題点を鋭く指摘して見せた。特に「韓国における」ネット書店の割引販売の現状と韓国再販事情」という例示は、日本との比較考察の萌芽を含んでいて、このまま日韓共同研究として成立させたいほどのテーマである。一方、中村氏は、「大学出版部が作るべき電子書籍」という考察を立て、「著作権保護と著作者との出版契約」の重要性について触れた上で「(大学出版部は)場合に合ったメディアを使って公刊するモデレーター(調整役)としての役割を求められる」と結んだ。いずれの論考も国際会議としての問題の踏まえ方を十分に意識したものであった。

思うに今回の日本側の発表には一つの大きな特長があった。それは、それぞれの論説が、他の二者の論考との間で絶妙なシンクロを見せていたことである。たとえば、後藤健介氏が提示した「コーディネートする編集」という見解と中村氏が述べる「モデレーターとしての役割」という見解は、ともに大学が知的生産の拠点であり、大学出版部はその知的生産物の公刊の担い手である、というところに論旨の基礎を置き、導きだした将来の展望に関する考察も共通の香りを漂わせたものになっていた。これが議論のコーポレーションの効用というものだろう。そして笹岡氏の論考は、市場から導き出した「学術出版社の立場」という視点で、後藤氏、中村氏の検討を市場原理から再考察する形

になっていく。今回の三本の論説は、日本側の発表としての全体的な統一感を漂わせるものになっており、論説相互に破綻の心配も必要なすばらしい内容の発表であった。

国際会議のガイドライン

ところで、返す返すも残念なことがある。それは、日本側が提示した重要な問題提起に対し、分科会の議論の反応が鈍かったことである。今回、日本側からはそれぞれの国家制度や立場を超越したところで議論しあうに十分な論点提示がなされていたように思う。ところが、残念なことに分科会の議論がこの論点の重要性に着目しきれなかった。各国からの発言は固有の問題意識に支配されたものが多く、本来期待される議論の中核を貫くものは多くなかった。自由な発言を保障する気運が、皮肉にも重要な論点を埋没させてしまったともいえる。そもそも国際会議というものは、立場や国家制度の異なる国の代表機関が互いに共通項を模索しあい、何らかの着地点を見出そうと努力するところに意義がある。とすれば、事前にその会議の到達点を予想したガイドラインを三カ国で検討することも今後は必要になってくるのかもしれない。国際会議のあるべき姿を求めて、私は、そのようなことを感じていた。

大学出版部の視野

ソウル大学の鄭雲燦総長は、本稿冒頭の言葉に続くも



セミナー会場となったソウル大学校経営大学前で

のとして次のように述べられた。

「各国の出版文化の中で、大学出版の占める役割が大きくなることを希望する。また、大学出版部が世界の出版に向けて飛躍することを期待する」と。

私たちが、日本・韓国・中国の国際会議のあり方について、「第四回琵琶湖セミナー」で理想を描いてから二年の歳月が経過した。その間、私たちにとって大切なことは「どこが異なるか」を探すことではなく、「どこの部分で話し合いができるか」を探すことだった。そもそも国家体制が異なる三カ国が会議をしようというのであるから共通事項が少ないのは当然のことなのである。それならば、国家を超えて人類の誰もが希求する社会を大学出版部がどうやって作ってゆけるか、と、そのことから考えればよい。そこには誠実で平和な社会を作るための共通のキーワードが確実にあるはずだ。「出版文化の中で占める役割を大きく(する)」ことや「大学出版部が世界の出版に向けて飛躍すること」ということも、実は、それ自体、大学出版部同士が共同で答を導き出すための一つの手段にすぎないことを忘れたくない。私たちは、二〇〇三年の「第七回札幌セミナー」に向けて、また動き出した。

本格化する大学の競争と大学出版

後藤 健介 (東京大学出版会)

大学出版部と一般の出版社との一番の違いとは、所属大学との関係で本を出している、ということだろう。その「関係」のありようは、大学によって色々な個性がある。しかし、いま例外なくどこでもその大学自体が大きく揺れていて、大学出版に携わる私たちにもいろいろな影響を及ぼしつつある。

今年の日韓中三方国セミナーの共通主題は「大学出版の環境変化と対応戦略」だった。それならば大学出版の最大の「環境」である大学の変化とその行き着くところを現時点で捉えておくことが、「対応戦略」を議論する前提として必要になってくるだろう。

「21世紀COEプログラム」の意味

ところで、この秋全国の大学関係者の話題をさらったのは、文部科学省の「21世紀COEプログラム」(COEとは「センター・オブ・エクセレンス」の略)だろう。これ

は昨年発表された「トップ30」構想、つまりある研究領域において上位30に選ばれた大学に集中的に国庫支出するという構想を現実化したものである。今年一〇月には五〇校一三プロジェクト、総計約一六七億円の交付がきまっている。

この話に触れる大学関係者の口調に切実なニュアンスが感じられるのには、ひとつの背景がある。国立大学の例を考えてみよう。二〇〇四年度からすべての国立大学が「国立大学法人」(独立行政法人)という形で、国家の規制ないしは保護からかなりの部分離脱することが確実視されている。国立大学の「独立行政法人」化とは、当初、国家公務員をこれで一気に約一三万人削減できることから、政府が行政改革の点数をかせぐ目論みかともいわれた。実際のところは、そうした国家行政の軽量化(国庫支出の削減)に加え、国家による管理を柔らげることによって、大学教育を活性化させる両面作戦というところだろう。しかし経

済の不況が長引くにつれ、しかも「学力低下問題」のなかで、日本の国際競争力を向上させる役割を大学は期待されはじめた。「大学の構造改革なくして、日本の再生と発展はない」(遠山敦子「文部科学大臣」)というわけである。かといって国庫支出を豊かにできるわけではない。国庫支出の削減と国際競争力の向上とが両立されなくてはならない。「21世紀COEプログラム」は、限られた財源を国際競争力の向上という目標設定の下に競わせて「傾斜配分」する制度だといえるだろう。

独立行政法人化以降の国立大学は、予算配分や人事、カリキュラムや産学連携を含む各種事業に自由が認められる。しかしそれと同時に、独立採算的な体制の確立が求められるだろう。一方で少子化により授業料収入も受験料収入も急減し「大学がつぶれる時代」が危惧されているのに、である。また、こうした国庫支出の争奪は、実は国立大学だけの問題ではない。

日本の私立大学はその収入のかかなりの部分を国からの交付金に依存している。近年の国の大学政策に対して私立大学は、国立大学との「公平・公正な競争環境基盤(イコー・フッティング)」「私大連」を主張、すなわち競争政策を積極的に容認しながら「公平・公正な「市場原理」」の作動を主張している。「21世紀COEプログラム」の「趣旨およびねらい」にも「国公私を通じて大学間の競い合いがより活発に行われることが重要」と端的に書かれている。

すべての大学が、国公立の区別ない競争に、本格的に突入している。おおくの大学関係者の脳裏には、「これを勝ち抜かなければウチはつぶれる」という思いがある。

大学出版への影響

「21世紀COEプログラム」は、実は大学の競争のひとつの例でしかない。「臨床心理士の認定校」「法科大学院」などの設置、入試方法の多様化による学生確保など、他大学との比較優位が争われているものはたくさんある。そして、これまでみたような大学と大学の間の競争は、今度は学内にじわりと浸透してゆく。

限られた学生・受験生の争奪、財源の争奪は、「集客できる学部」「集金できる学科」をめざす学内各部署間の競争に移ってゆく。しかもこの競争には、いわば「成績通知表」がある。この数年で日本の大学を動かす大きな力となっているのは「外部評価」の制度である。大学評価機構の評価が、今後、大学・学部学科の存立や、国庫支出の多寡に影響する可能性も議論されている。この対応のため大学内の各学部・学科・研究所は、「業績」の確保とその表現に莫大なエネルギーをさかねばならなくなっている。すでに、教員の業績を論文や書籍刊行の数で評定する岡山大学のような制度が話題になっているが、将来業績点数が人事考課・資格認定にも直結する事態も想定できる。

さて、ここで出版の話になってくる。色々と考えられる

問題のうち、ここでは博士論文の書籍刊行をみる。私の狭い見聞でも最近とみに多くなったのが博士論文の刊行打診だ。博士課程を修了したものは、文部科学省の統計によると一九九〇年から二〇〇〇年までの間に二倍以上になっている。大学淘汰もささやかれる時代の院生の就職は、その若手研究者個人の問題であり、同時に指導教員・出身研究科（講座）の将来がかかった問題でもある。

もちろんそうした動機のみから業績刊行が求められるわけではなからう。しかし博士論文は、きわめて専門化したある範囲での高度さを審査されるものである。学問が細分化している今日、ある分野での高度さがかならずしも周辺分野への影響につながるとはいえなくなっている。図書館に製本された論文が配架されるということ以上に、数百部なら数百部、二千部なら二千部の本として刊行することの意味はなにか、このことを最近よく考える。

これは単に売れる売れないという経済性の問題にとどまらない（しかしこの問題は大きい）。一定数以上の知的生産者や高度な関心をもつ読者を想定して学術出版という活動を継続的に行うことによって、知のコミュニケーションの「場」を提供してきたのが大学出版だとすれば、業績論的な動機が勝るモノログのような本を作ってゆくことは、実はこうした大学出版の公共性の自己否定でもある、そのように言えないか。第一、論文を出版したいと考える人は、出版すればより広範な読者を得られるだろうと考えるから

こそ出版を打診するのだろう。ならば私たち出版の現場とすれば、博士論文を刊行したいという意欲を研究者がもつてくれるのであれば、出版社とともに、より多い読者を得るよう、本として作ってゆく」ということに同意してほしいという気持ちが生まれてくる。

最近では、学術振興会の科研究費刊行助成をはじめ、たとえば東京大学出版刊行助成制度が発足するなど、困難な出版事情の中、学術書の刊行を後押しする制度は徐々に整えられつつある。東京大学の刊行助成は、比較的若手の教官および東京大学で作成された学位論文を対象としている。

しかし、と思う。どれだけ制度が充実し、どれだけ援助があろうとも、コミュニケーションへの意志をきちんと表現するものでなければ、本として出版してはいけないのではないだろうか？ もっとも、これは乱暴な意見で、すくなくとも実際上の判断が難しい。編集者が知的世界をくまなく知悉しているわけではないし、コミュニケーションが「将来に向けて開かれている」（つまり、現時点ではあまり読者がいない）場合の判断はどうするべきか、知的世界のありかたや動向を固定的にとらえると、学問の多様性を大学出版自らが限定する危険もある。しかし、ちょっとした用語法の注意、論理展開の補足だけでも格段に読みやすさは増す。編集現場の工夫としてなすべきことは多い。さらにまた、ある大学出版部がどんな本をだすことで話題を提供し、知的生産の世界の動向を可視化してゆくかということ、

本を出すささないの決断（積極的にいえば「企画」）は、補助金の有無にかかわらず絶対放棄してはいけないのではないか。

韓国・中国の大学出版社ではどうか

以上のような話をセミナーでもしてみた。大学での競争原理が業績刊行意欲につながっているのなら、大学出版社はそれを読者にきちんとコーディネートすること、編集にこだわり編集機能を拡張する主張を隣国の同業者に問うてみたわけだ。しかし、中国の大学出版社の反応は喚び起こせなかった。中国は出版市場も大学教育もまだ拡大期である。中国側の主題発表「大学出版社の発展チャンスと特色図書育成」のように、拡大する経済という「環境変化」のなかで、どんな本を出せばもっと売れるのか、というようなことが中国側の関心であったように思える。

一方で韓国の大学は、たとえば会場になった国立ソウル大学はすでに独立行政法人であり、むしろ日本より先にアメリカなどをモデルに競争的な大学制度を形成している。その韓国側の主題発表が、朱弘均氏（建国大学出版部長）

の「デジタル時代における韓国の出版環境の変化と大学出版社の志向目標」だった。「トータルマーケティング」、つまり「企画↓編集↓マーケティング↓結果分析↓データベース構築↓再企画」という有機的な連携を大学出版社が実現すべきという発表だった。実はこれには従来の韓国の

大学出版社のありかたに対するかなり根源的な再考が含まれている。韓国の大学出版社は従来、その大学の教員が直接的な差配をしており、学術的価値があると認められれば赤字を覚悟で出版し、その赤字は大学が補填するというようなありかたが多かったと聞く。しかし近年では大学出版社が学術出版のメディアとしてきちんと機能しているか、その採算性も含め厳しく問われている。そんななかで、経済的な採算性確立を、読者をより正確に確実にとらえてゆく契機にしようとする朱氏の提案には、大きな共感を覚えた。

日韓両国の大学出版社は、大学の改革をはじめとする知的生産環境の、逆風とも思える激変のなかで、本を出すことを通じてそれに参画することをはじめている。しかし知的環境の変化をとらえ、媒体に具体化し、公共空間にコーディネートしてゆくことは、そもそも編集、さらには出版社の機能の原義ではなかったか。今回のセミナーはこうした出版の原像を再確認する契機となった。

変革期の学術出版とオンライン

笹岡 五郎 (専修大学出版局)

出版データの裏側にあるもの

今年の『出版月報』（出版科学研究所）七月号によると、上半期（一～六月）の出版物総販売額は一兆一七五八億円で、昨年比一・五%減となった。W杯サッカーが書店から客足をうばった影響もあるようだが、どうやら出版業界が六年連続マイナス成長になるのは避けられない模様である。

振り返ってみると、日本の出版物の総売上が一兆円を超えたのは、一九七六年である。二兆円を突破したのは一三年後の八九年で、そのまま同率で伸びていけば次の一三年後、すなわち二〇〇二年の今年は三兆円になるはずであった。ところが九六年に二兆六五四億円というピークを記録したあと、年々漸減していつて、今年は一兆三〇〇億円円台に落ち着きそうな情勢である。

これで分かるように、日本の出版界はどうやら九六年頃から何らかの地殻変動が起きている。私たちはいま、数十年に一度の出版の変革期に際会していると言っている。

ある。そしてこの変化に危機を感じている日本の出版人は多い。しかしこの変化は本当に「危機」なのだろうか？

正直なところ私はそうは思わない。危機というよりは、何かもつと他の内実を胎んだ、たとえば回避し得ない変化とでもいうふうに考えたい。その変化の要因として何が考え得るだろう。

一つは、九〇年代初頭にはじけたバブル経済がボディブローのように数年遅れで影響してきたことがあげられる。そして「九六年頃からの変化」に着目すると、前年暮れにウィンドウズ95が発売されて、秋葉原電器街に二万人以上が押し寄せたという、全国的なパソコンブームが思い起こされる。翌年には幕張メッセを主会場にした華やかなインターネット ワールドエキスポジョンが開催されたのである。つまり出版界の下り坂の入り口であった一九九六年は、日本のインターネット元年でもあったのである。

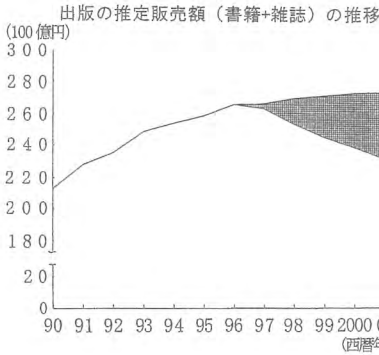
シフトするメディアⅡ出版

ここで、先にあげた日本の出版物の売上げデータに戻って、考えてみる。この出版の基礎データは出版科学研究所が毎年まとめているもので、業界の指標としては広く使われている。しかし出版科学研究所はトーハンの関連機関であり、発表されるデータはトーハンを経由した出版物の数量から推計されたものである。従ってこの数値に含まれていないものがあって、それは、

① 出版社などによる（取次を経由しない）インターネット通販の売上げ

② 出版社と書店の直取引によるもの

③ 出版コンテンツのインターネット上での直接販売などが考えられる。



これらはいずれも、(1)話題性があって、(2)売上げは大きいことないが、(3)増加率がすごい、という、インターネットがらみの出版新事業に共通する特色がみられる。この分野ではさまざまな新規事業が立ちあがっているので、数年後にはもはやデータの裏側に寝かせていられない数字にふくらむと考えてよい。

こうしてみると、出版科学研究所の基礎データにカウントされない売上高は年々増えており、それは上図のように表わされる。実線aは公表された売上額で、取次を経由したこれまで通りの紙本中心の販売推移。斜線部は（取次を経由しない）新しい流通にのった紙本及び電子コンテンツの販売高である。言い換えれば、aは印刷文化の曲線、bは（紙の印刷だけではない）広義の情報文化の曲線と捉えることができる。私たちが出版の未来を考えるとときに、このbの曲線を、これからの可能性の上限とすべきではないだろうか。

かつて情報は、テレビ（LIVE、速報）新聞（日刊）出版（週刊あるいはもっと長期）の三者で安定的な役割分担があったが、パソコンの出現はそれを攪拌し、メディアの淘汰とシフトを発現させた。これまで出版の世界はaの曲線だけ考えればよかったのに、bという曲線を出現させた犯人（とあえて表現しておくが）が実はどこかにいるのである。インターネットは誕生して十歳に満たないやんちゃ坊主だが、どうやら年齢以上に大物ぶりを発揮しはじめ

ている。そしてその一方では、やはり変化という点でもう一つの因子があって（といっても、それは変化させたというより、出版界を永く変化させなかつたという意味だが）、それが再販制である。

委託販売の功と罪

ここで少し時間を遡って考えてみよう。日本で最初に委託販売された出版物は、一九〇九年に実業之日本社が創刊した『婦人世界』だと言われている。それまでの買切制とちがって書店は欲しいだけ注文でき、売れなければ返品できるもので、書店の積極姿勢をひきだして雑誌は成功した。

その後は買切と委託を併用して、出版界は比較的自由な発展を遂げ、一九四〇年頃には書店一万店、取次二四〇社、出版社三六〇〇社という広がりをみせた。今から六〇年も昔だが、意外にたくさんの会社で賑わっていたのである。それぞれの会社の規模は小さいとしても、日本の人口が七三〇〇万人であった当時、すでに豊熟した出版業界があり、町には必ず本屋さんがあって、棚は書籍中心で、大衆娯楽雑誌やマンガは店の隅に追いやられ、ゆったりとした活字独特の文化のようなものが息づいていたはずである。

ここで注目されるのは、取次会社の数の多さである。それまで書店は直接出版社に本を買いに来ていたが、一八七八年に良明堂という最初の取次ができ、続いて東海堂などができて四社体制になる。さらに雑誌『太陽』で儲けた博

文社は東京堂という直営の取次を持つなど、出版ジャンルに応じた中小取次が次々につくられた。人間の目のゆき届いた、きめ細かい出版流通ができていただろう。この頃が日本の出版界で「統制的でなかつた」最後の時代といつてもよいかもしれない。

一九四一年に、戦時統制政策で取次は日配（日本出版配給株式会社）一社に統合され、この寡占体制が戦後はトーハンと日販の二社に名を変え、現在まで続いている。これが「流通システムの安定」と「売上げ拡大」を出版界に享受させつつ、一方で、売上げと効率を追求するあまり、消費者の欲望と添い寝する形になったこともまた否定できないのである。

たとえば一八九〇年頃の売上比率は、雑誌が三で書籍七だったが、現在は、雑誌が六で書籍四に逆転している。書籍よりも雑誌、ロングセラーよりもベストセラーという志向性が業界にはあって、それがたえず消費を扇動してきた。その流れをサポートしたのが、委託販売制度である。

この制度は利点も多かったが、書籍においては、本質的な問題を発生させた。たとえばある読者がA出版社の本を近所の書店に注文したとする。これはA社にとって、出荷と同時に売上げが確定する、もっとも優良な買切注文品である。ところが本を受け取って一週間後に、当の読者が書店に本を返しに行ったとする。このとき申し出を断る書店が何軒あるだろうか。多くの場合、本はそのまま取次経由

で返品される。ただし、こういうことでは普通、会社の経営は成り立たない。ところが出版界では、委託制度の拡大解釈からくる「ぬるま湯的」感染症があつて、返品の手をつくってしまったのである。結局、自主改革が行なわれる前に、コンピュータ化の波と本離れ現象のダブルパンチを食らう形になったのである。

学術出版のこれから

一九八二年『日経ビジネス』二月八日号の特集は、「軽・薄・短・小化の衝撃」だった。前年末に日経流通新聞がとりあげた「ヒット商品番付」には、パソコン、軽自動車、携帯用ヘッドホンステレオ、ミニコンポステレオ、携帯用キーボードなどが並び、そのどれもに共通する要素は、軽い、薄い、短い、小さい……だった。それから二〇年たった現在、出版も含めて各産業が作りだすモノの多くは軽薄短小のコンセプトに彩られている。モノだけではない。本離れの理由として、二〇〇頁も三〇〇頁もある長いものとはとても読む気がしない、そんな重い本は持ちたくない、などという若者の新しい感性にもそれは表れている。

このような時代を、日本の出版界はとくに劇的な自己変革をすることもなく、大局を見ながら動いていくかもしれない。なぜなら、十年という長ながしい議論のすえ再販制度が元のまま残存したからである。おそらく誰もが予感しているように、今後、紙本の売上はなだらかに長い時間を

かけて下降していくだろう。本離れ現象はだらだら続き、やがてある限界点に達したときに、劇的な変化がはじまり（それはおもに会社経営の問題であり、原価計算の問題だが）、変化がはじまるとわずか五、六年で電子のシェアの突出が起るかもしれないのである。

ただ、そういう紙本出版文化の不透明感のなかで、学術出版についていえば、高額本としてしっかりした内容を備え、装丁や造本にも費用を配分でき、大きな図書館で長期に確実に保存してもらえる。また、オンデマンド印刷による少数数出版で読者のニーズにこたえながら、紙本文化を未来につなげていけるかもしれない。また、日本製「電子ペーパー」の商用化がはじまり、カラー表示も可能になってきた。この進展と、出版社の電子コンテンツが出揃えば（こちらはかなり時間がかかりそうだが）、新しい出版のオンライン市場が創出されるだろう。それを視野に入れながら、大学出版部は自社の出版物のデジタルデータ整備、学術情報データのプラットフォームとしての展望と技術を備えておくべきだということを最後に記しておきたい。

考察・日韓中大学出版部の電子出版への取組み

——三方国合同セミナーにおける議論の変遷

中村 晃司

(東海大学出版会)

一九九七年から日本・韓国・中国の大学出版部協会は、共通言語を持たないという障害を超え、一年に一度集結し、合同セミナーを開催している。ここ三年間は、「大学出版部の社会的役割」というそれぞれのお国柄・情勢が露骨に反応し、眼に見えづらい複数年課題を掲げ、継続性を重視しながら、日本・琵琶湖、中国・上海、そして今年の韓国・ソウルと三年間越して議論を重ねてきた。筆者は幸いにしてこの三回のセミナーに連続参加することができ、今年のソウルでは、分科会報告者の大役を任された。

過去二回（琵琶湖・上海）のセミナーでは、出版環境、いや生活環境をも様変わりさせたITがらみの議論がより多く展開された。三方国間には技術と環境が一般に普及するまでの速度・物理的な差異はあれども、「大学出版部の社会的役割」という論点をより明確にするためには、三方国間に共存する国家的問題として関連付けられる「IT」に焦点が集まるのは、当然の成り行きだったように思う。

電子出版への期待

もちろん、三方国セミナーはITに関する話題のみを扱っているわけではないが、特に上海セミナーでは、「インターネットと大学出版」という年次の共通主題が設定されていたこともあって、「電子出版」に関する議論は、他の議題を凌駕するものがあった。参加者個々人の表現の差はあれども、韓国側からは「出版不況を打開するための媒体」として、中国側からは「近い将来枯渇が予想される紙からの代替媒体」として、それぞれ電子出版の有効性が唱えられ、同時に電子出版にかける義務感と情熱が強く内包される歯切れよい意見が目立った。

対する日本側の主張は、権利切れの文学書、ノンフィクションや文芸書では既に始まりつつあったが、学術書の電子出版が皆無に等しい状況を踏まえ、「技術力はあるがハード面での環境は整うも、著作権法上の整備、課金方法、電子版対応の出版契約の不備といった諸問題が好転しない限

り難しい」とし、情熱と義務感に勝る韓国・中国側からは不思議に思われるほど、慎重な姿勢に終始した。

ただ、技術論や業界全体を範囲とした一般論が大半を占め、研究成果の公刊、知的情報の社会還元という一般の版元と性格を異とする大学出版社に相応な電子出版とは何か、何を作るべきか、という日常の出版活動に直結する重要なファクターについての議論はおろか、三カ国お互いが交錯することなく時間切れを迎えた。日本側参加者の多くは、後悔にも似た消化不良の感を抱きつつ、帰路に就いたのだった。

意外な展開

そして今年、大学出版社として相応しい電子出版とは？という二年越しの課題に取り組むべく、韓国・中国側参加者が疑問に感じたと思われる日本の学術書電子出版が遅々として進展しない真因を総括し、大学出版社が作るべき電子出版物とは、(現状では母体大学との連携における電子教科書ではなかるうか)という提言を付した拙論「日本の大学出版社と電子出版——ネットワーク型電子出版への視点・問題・課題」をまとめた筆者は、分科会報告者としてソウルセミナーに臨んだのだが……(拙論の概略は紙面の関係上割愛させていただくが、大学出版社協会公式サイト <http://www.aiup-net.com/> に全文が掲載されているのでそちらをご覧ください)。

セミナー当日、報告集が配布され、報告者の発表が進むにしたがって、議論の醸成という小さな期待は木っ端微塵となる。韓国・中国側の電子出版に対する情熱と義務感の著しい低下という予想もしていなかった展開、つまり、韓国国内での電子出版に対する期待感はやや後退し、中国側の関心は電子出版よりも(今年に限ったことであろうが)日韓の出版部経営のエッセンスを得るといって、参加者ほぼ全員から滲み出る欲求に様変わりしていたのだ。

ダイナミック・コリアにある電子出版の挫折

「五千年の歴史に輝く伝統文化と二一世紀の繁栄を約束するIT、科学技術が一つになった韓国」ダイナミック・コリア」と銘打たれた韓国政府主導のIT重点戦略は、九七年の通貨危機に端を発したIMF(国際通貨基金)介入でどん底に落ちた経済を立て直すに十分な効果を発揮し、僅か三年で日本はおろか、米国をも超える世界最大の情報テクノロジー国家に変貌を遂げた。この背景をもってすれば、過去二回の韓国側の電子出版に賭ける情熱は十分領ける。ところが、「二〇〇〇年には、……出版市場の救世主のように考えられた電子本に対する大きな希望は、わずか一年も経たないうちに挫折することになりました。一時、政府の支援政策と雰囲気作りによって、猫も杓子も電子本市場に飛びついた企業などは、電子本に関するコンテンツ生産者と使用者の冷淡な反応で、市場は硬直して景気沈滞

とともに困難を経験しなければならなかった」。

朱弘均・建國大学校出版部長によるこの辛辣な報告は、電子出版への情熱という蒸気を冷ますには足り余るものがあった。だが、韓国の大学出版部の大半は教員が出版部の要職に就く中、「現場上がり」の出版部長として業界内でも著名と聞く朱氏の報告に、同僚・韓国側の出席者から大反論が展開される。「本当のところは？」と素朴な疑問も湧くが、冷静に考えてみると、たとえ朱氏の主張が韓国国内で異端であったとしても、「電子出版で出版不況を打開する」という、意気揚々とした昨年までの韓国側の足並みに乱れが生じているのは、どうやら間違いないさそうだ。

韓国では、最大三〇％割引で台頭するネット書店の「鋼の刃」の如き攻勢に、定価販売という「木製の盾」で対抗していたリアル書店は危機的状況に陥り、老舗の大手書店数店を含め軒並み暖簾を降ろしていると聞く。ようやく今年、韓国政府が書籍の割引販売に規制をかける法律を制定したというが、未だ出版不況を潜行する韓国出版業界の起爆剤となるはずだった電子出版は、「紙版書籍の廉売」には適わなかったというべきか。電子出版は、発展し続けるダイナミック・コリアの中では劣勢に立たされ、挫折を経験しているのかも知れない。

電子出版よりも出版社経営に関心が移る中国

今回のソウルセミナーにおける中国側の報告は、残念と

いふべきか、いずれも「報告者の所属する出版社の活動報告」や「母体大学の特色を出版の主力分野として活かし、中国社会の発展に貢献する」といったものだった。昨年のセミナーで風靡した電子出版に関する話題は多くて数行「電子出版に善処する」という趣旨に止められていた。

実は、昨年の上海セミナーで、人民大学出版社の周蔚華氏が「インターネット出版は、伝統的な物流様式を変化させ、（紙）資源の浪費を減少させ、同時に出版の時間を大幅に短縮し、中間の過程を減らす……」とし、電子出版は、中国に存在する「今そこにある危機」「紙の枯渇」という国家問題に対する最善の方策であると論じていた。さらに、中国では「校産企業」と呼ばれる大学の技術移転機関（TLO）の代表格で、北京大学が一〇〇％出資する中国最大のIT企業グループ「北大方正集団公司」から派遣された電子出版事業の担当者が突如現れ、電子出版の有効性・可能性・必要性を切々と語っていた。そんな背景にプラスして、中国のインターネット人口が爆発的に伸び、今年の六月には四五〇〇万人を突破したという情報を把握していたこともあって、今年も相当な意気込みで電子出版論が語られると考えていたのだが、目論見は見事に外れることとなる。

日韓の報告者各氏の発表が終わり、質疑応答の時間に入ると同時に、中国側から報告者の発表に沿わない形で、日韓の製作原価率、製作原価に含まれる印税率の割合、翻訳

書出版の著作権使用料や翻訳の印税率……といった数字に
関する質問が飛び交った。一体、昨年の電子出版への情熱
は何処に行ってしまったのだろうか。

今年の中国側の反応と主要大学出版社のウェブサイトを
眺めてみて推察するところ、どうやら電子出版に大きな進
展はなく、大学出版社による電子書籍の配信というステー
ジには達していないようだ。それよりも中国では、二十一
世紀に向けた教育部による一〇〇大学及び専攻分野を重点化
する政策（二一一政策）が依然進行中であり、同政策は政
府からの支援とは別に、産学連携費、寄付金、授業料の管
理や出版社の経営など、大学の独立化・自主性を求めてい
るのだという。

これから想像すると、今中国では大学と大学出版社の関
わりという基本的視座において、「母体大学からの介入↓
出版社の反駁と改革」を繰り返す調整期に入っていると考
えられよう。現状では、印税の配分率、原価に占める印税
の割合といった出版社運営と管理そのものに対する興味・
関心に電子出版は勝らないと見るべきだろうか。また一方
で、「紙の枯渇」という国家的危機は経営と利益志向の重
要さに劣るのか、という穿った見方もしたくなる。

「教育と大学出版」と電子出版

来年の八月中旬、第七回合同セミナーは北海道札幌市を
会場に開催される。来年以降三年間は「教育と大学出版」

を継続主題に、まさしく大学出版部の理念の根幹をつく大
きなテーマで議論が展開される。

残念ながら大学出版部の社会的役割という枠組みの中で、
三カ国ともに共有する問題であり議論の醸成に向かうはず
だった「大学出版部が作るべき電子出版」という課題を正
面から扱う機会は遠くなってしまった。しかし、現代の教
育事情にITが絡まないわけではなく、eラーニング、遠
隔教育、電子教科書……など、教育と出版を論ずるにはIT
という視点を避けて通れない。もちろん、ITに重きを
置いた議論が展開されることは、三カ国ともに望むところ
でないだろうし、そうあるべきではないと思う。ただ、媒
体・伝播手段として、教育と出版とITは密接にリンクす
ることを忘れてはならない。今回のソウルセミナーで、微
力ながら母体大学との連携における電子教科書作りの重要
性を指摘したが、以降三年間の議論の展開に一助とな
ることを願っている。

教育と研究の両輪で社会に貢献する大学、その大学に付
置される大学の出版部は、何が作れるのか、何で貢献でき
るのか、そこにITはどう絡んでくるのか。当たり前のよ
うだが、日本を含め、来年以降の韓国・中国の仲間達によ
る報告・発言、そして三カ国議論の行方が、今から楽しみ
でならない。

一緒に暮らしたい動物

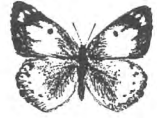
青木淳一

自然保護や生命尊重の教育が徹底したお陰で、「どんな生き物にも命があるのだから、大切にしなければいけない」という考えが人々の頭にたたきこまれた。しかし、実際はどうだろうか。メジロはかわいけれど、カラスは憎たらしい。トンボはいいけれど、ハエはいやだ。こんなふうに、人間にはどうしても動物に対する好き嫌いがあって、その感情は押さえきれない。これは人間にとって有益か有害か、という問題とはまた別の感覚的なことであって、それは人によってさまざまに異なる。

自然界に生息する動植物の種組成を人間の勝手に変えてしまうことは基本的に許されないことではあるが、人間が高密度に住んでいる都市や町の中だけは人間の好みや我がままを通してもらって、好きな動植物だけが存在するような環境を作っても許されるのではないかと最近考えるようになった。町づくりのプランの中に、人間と一緒に住む動物たちのことを取り込んでもいいのではないかと。さて、そうなると、住民たちはどのような動植物が好きなのだろうか。

植物の場合は、街路樹として植えられるイチヨウ、スズカケノキ、ケヤキ、公園に多いクスノキ、ムクノキ、カエデのなかま、雑木林を構成するコナラ、クヌギ、エゴノキ、人家の庭に植えられるマツ、ツバキ、クチナシ、キンモクセイなどは、みんな人間の好みにあった種なのだろう。しかし、動物となると、植物のように「植える」わけにはいかず、いろいろな種類が勝手に住みついてくる。なかには喜ばしいものもあれば、嫌な奴もいる。横浜国立大学に勤務しているとき、私の講義を聴いている約一五〇人の学生を対象にアンケート調査を行った。全部で三三種の動物を示し、「君たちはこれらの動物と一緒に暮らしたいかどうか? それぞれの動物に「イエス」なら○、「ノー」なら×をつけなさい」という問いかけをした。結果は次のようであった。

○の数の多さで、一位はウグイスの八七%、続いてムササビ、タヌキ、ツバメ



が八〇%台、キツネ、カメが七〇%台、チョウ、テントウムシ、フクロウが六〇%台、タカ、イタチ、カタツムリ、セミが五〇%台。以後は×の方が多くなるが、カエル四六%、ミミズ、トカゲ、クマ、イノシシが三〇%台、コウモリ、イモリ、ヤモリ、トラ、クモ、ネズミが二〇%台、ワニ、シマヘビ、イモムシが一〇%台、マムシ、ガ、スズメバチ、ハエになると一〇%以下になる。

この結果を見て、好き嫌いの順番はおおむね私が予想したとおりであった。しかし、よく見ているうちに、だんだんと「あれ、おかしいな」と思い始めてきた。たとえば、ウグイスと一緒に暮らしたい人は八七%いてトップの順位であるが、なぜこれが一〇%にならないのか？ 引き算すると、一三%の学生はウグイスと一緒に暮らすのが嫌なのである。同様に、二四%の学生はカメと一緒に暮らすのが嫌で、三二%はテントウムシが嫌い、四七%はカタツムリが嫌いなのである。こんなに好ましく、愛らしい生き物までが、少なからぬ学生に嫌われているという事実には、私は愕然となった。現代の若者の自然離れが、ここまで生き物に対する「気持ち悪い志向」を増大させてしまったのか。

植物とちがって特定の動物を町の中に定着させることはたいへん難しいが、多くの人々が一緒に住みたいと思う動物が好む環境をうまく創造して配置すれば、今の技術をもってして決して不可能ではないだろう。しかし、これからの人類がそれを望まないのであれば、そんな努力は無駄になってしまう。私の気持ちは、いまちよっと沈んでいる。

(神奈川県立生命の星・地球博物館)



ソウル 「国立中央博物館」

今回ご紹介するのは、九月にソウルで行われた日・韓・中の大学出版部協会による「第八回合同セミナー」参加の折に訪れた「国立中央博物館」である。この博物館は、ソウルのメインストリートの一つである世宗路の北端に位置し、朝鮮王朝の王宮であった景福宮の敷地内にある。ソウルの主立った観光スポットの一つでもある。

一九〇八年に韓国皇室博物館として開館した当館は、一九一五年以降の朝鮮総督府博物館という時期を経て、韓国独立後に国立中央博物館へと改編された。移転を重ねた後、戦後五〇年を機に撤去が決まった旧朝鮮総督府の建物から現在の建物へ移転した。現在、ソウル市内竜山に大規模な新博物館への移築計画が進行しており、二〇〇三年に完成予定である。周囲は、大使館や政府の庁舎なども並ぶ官庁街で、世宗路の大通りも車の流れが絶えることがないが、一步敷地内に足を踏み入れると、そんな喧騒と隔って広大な公園といった趣。しかしここ景福宮は、かつて十数万坪の広大な敷地に約二〇〇棟程あった殿閣のほとんどが一五九二年の文禄の役における豊臣秀吉の朝鮮出兵によって焼失したという場所である。その後大規模な復元がなされたものの、一九一〇年に日韓併合されると、また数多くの建物が破壊され、王宮のバランスを壊す形で朝鮮総督府が建てられたという経緯もあり、この場所自体も歴史上の重たい遺物である。

現在の建物は、地上二階、地下一階の三フロアに一八の常設展示室と二つの企画展示室が設けられている。常設展示室は、先史時代から統一新羅に至る時代ごとの部屋があり、高麗、朝鮮時代は各時代の特徴的な陶磁器ごとに部屋が分かれている。その他、仏教彫刻室や、金属工芸室、絵画室など分野ごとの部屋が設置されている。所蔵される遺物は、およそ三万点、そのうち常設展示されているのは約五一〇〇点である。また、この博物館は、文化財や資料を収集、保存、展示し、これらに関する研究、調査を行うだけでなく、伝統文化の啓蒙、広報、普及をその目的として掲げている。そのため観光客のみならず、多くの学生も訪れる

所在地 ソウル市 鍾路区 世宗路1-57
 開館時間 3月～10月
 午前9時～午後6時（入場は午後5時まで）
 土・日・祝日 1時間延長
 11月～2月
 午前9時～午後5時（入場は午後4時まで）
 休館日 1月1日、毎週月曜日
 入館料 一般（25歳以上）：700ウォン
 7歳以上24歳未満：300ウォン
 6歳以下：無料
 ※毎月第一日曜日入場無料

という。実際ここでは子どもからお年寄りに至るまで、様々な年代を対象にした文化講座や、博物館教室を行っている。我々が訪れた際にも、母親に付き添われた小学生らしき女の子が、真剣に展示品をスケッチする姿を目にした。国の機関として伝統文化を継承し、歴史教育によって国民を啓蒙・啓発しようとする姿勢が感じられた。

この博物館の展示の中で興味を惹かれたのは、三国時代の高句麗・百済・新羅と並んで伽那（加羅）のブースが一室設けられていることである。伽那は六世紀に新羅に併合されるまで統一国家となることはなかったが、多くの小国のゆるやかな連合体として、三国に匹敵するほどの力をもつ国家（連合）だったとされる。国宝の金冠など、華やかな金製品が並ぶ新羅室と比較すると地味な感じはあるが、鉄資源が豊富で製鉄技術が発達していたとされる伽那ならではの、錆びた鉄製甲冑などが並ぶ。長崎県の原の辻遺跡からは、半島南部の多数の土器に加え、金槌などの鉄製品が出土しており、原三国時代の弁韓や、その後の伽那と対馬海峡を挟んで北部九州との交流が行われていたことが伺われる。

現在、博多港から釜山までは高速船で片道三時間弱。かつて様々な文化が伝播した海峡を渡り、前期伽那の中心となった金官国（現金海市）など、ゆかりの地を訪ね歩いてみたいものである。なかなかそれが叶わない、という方々には、九州大学総合研究博物館のホームページ上にある、インターネットミュージアム・「倭人の形成」(<http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/WAJIN/wajin.html>)をご覧ください。「渡来人のルーツと渡来ルート」などのテーマについて、古人骨を対象とした人類学・考古学・医学などの分野に渡る考察が学際的になされていとおもしろい。ここならば、数十分もあれば一巡することができる。机上で海峡を渡る渡来人のイメージを膨らませてみるのも、また一興である。

（九州大学出版会 古澤言太）

大学出版部ニュース

▼「第六回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー」開催

今年共通主題を「大学出版の環境変化と対応戦略」として、八月二六日韓国ソウルのソウル大学校にて開催された。二十年來の日・韓大学出版部セミナーに中国を迎え三カ国セミナーとなり六年目である。「共通主題」を設定し、「分科会」で議論しあうという形式も定着し、活発な意見交換がなされた（詳細は本号特集を参照）。プログラムは以下のとおり。

共通主題

「デジタル時代における韓国の出版環境の変化と大学出版部の志向目標」朱弘均（韓国・建国大学校出版部）／「日本における国立大学制度の変化と大学出版」後藤健介（東京大学出版会）／「大学出版社の発展チャンスと特色図書育成」蘇青（中国・北京理工大学出版社）

第一分科会

「出版環境の変化に伴う大学出版部の対応戦略」金延奎（韓国・放送通信大学校出版部）／「変革期の学術出版とオンライン」笹岡五郎（専修大学出版局）

「積極的に出版への情報化挑戦に応ずる」周蔚華（中国・人民大学出版社）

第二分科会

「韓国大学出版の環境変化と対応戦略」白仁煥（韓国・成均館大学校出版部）／「日本の大学出版部と電子出版」中村晃司（東海大学出版会）／「図書の構成を調整し、中国外国語教育事業の発展のために努力する」汪義群（中国・上海外国語大学出版社）

来年八月の第七回セミナーは、北海道東海大学札幌キャンパスで行われる。共通主題は「教育と大学出版（部）」でeラーニングなど劇変する大学教育と大学出版の今後を討論する。会場では参加出版部の図書の展示も行われる予定。

▼「二〇〇二年度大学出版部協会夏季研修会」開催

八月二二日から二四日までの三日間、名古屋市の愛知厚生年金会館「ウェルシテイなごや」で行われた（担当・早稲田大学出版部）。井上進教授（名古屋大学）の特別講演「中国における出版の歴史と

文化」、三重大学出版会と関西大学出版部によるケーススタディ、協会各部会合議、そして三カ国セミナーの「プレ発表」と、盛りだくさんの内容であった。二四日早朝には、三カ国セミナー派遣団が名古屋空港から開催地ソウルに乗り込んでいった。

▼講演会「高等教育におけるeラーニングの現状と課題」開催

九月一二日、東京電機大学において、東京大学大学院情報学環の山内祐平助教をお招きして講演会を開催した。日本では企業が研修を目的としたeラーニングをはじめているが、ここ数年では、大学レベルでインターネットなどの情報技術を基盤とした教育が取り組まれており、新しい学びのコミュニケーションを出現させつつある。すでに「ブーム」は去ったといわれるアメリカの現状から、山内先生が携わった東京大学大学院情報学環の「iiiオンライン」の事例、そして今後の課題と従来型書籍との関係まで、非常に刺激的な内容であった。

北海道大学図書刊行会

▼ジャネット・アバテ著／大森義行・吉田晴代訳『インターネットをつくる―柔らかな技術の社会史』（A5判・二八〇〇円）一九六〇年代の軍の試験的なネットワークから、九〇年代前半にワールドワイドウェブによって地球規模のシステムへと変貌していく過程を、単なる技術史ではなく、技術の社会的形成、利用者の果たす役割などに注目し詳述。歴史を知り、将来を考える際の必読書。▼地学団体研究会道南班編『道南の自然を歩く・改訂版』（B6判・一八〇〇円）渡島半島の自然は、本州東北地方と北海道中央部の中間的要素を兼ね備えつつ、かつそれらとは独立した独特の特徴をもっている。最新情報を加えて大幅な改訂を行なった。「自然を歩く」シリーズ全六巻完結。▼大沼盛男編著『北海道産業史』（A5判・三二〇〇円）北海道の産業分野を可能な限り細分化し、各産業の生成、発展、衰退の要因を分析。さらに各産業の道内・全国経済における位置づけの変遷や、北海道経済に各企業・国・道が果たした役割などについてもまとめた。地域経済論を学ぶための最適のテキスト。

聖学院大学出版会

▼ポール・ヘルム著、松谷好明訳『カルヴァンとカルヴァン主義者たち』（近刊）宗教改革者カルヴァンの思想は、ヨーロッパ、イギリスの政治思想、社会思想に多大な影響を与えてきた。しかし、近年研究者によって、カルヴァンの思想は、後継者のカルヴァン主義者たちによって変節され、影響を与えたのはカルヴァン主義者たちの思想であるとする主張がなされている。本書はこのような立場を代表するケンドールの研究に対して、カルヴァンの著作に基づき批判を加え、カルヴァンの思想が、イギリス・ピューリタニタンに継承され、イギリスにとどまらず、ヨーロッパまたアメリカにおいて大きな影響を与えてきたことを論じる論争の書である。このほか、ジョン・ミルトン著、新井明・野呂有子訳『イギリス国民のための第一、第二弁護論』、ローラ・ガルスト著、小貫山信夫訳『チャールズ・E・ガルスト―単税太郎の生涯』、マックス・スタックハウス著、深井智朗ほか訳『パブリック・セオロジー』など出版準備中。

麗澤大学出版会

▼速水融著『江戸農民の暮らしと人生―歴史人口学入門』（四六判上製・二四〇〇円）日本における「歴史人口学」のパイオニアである著者が、宗門改帳のデータ分析により江戸農民の生活と行動を解明、従来の常識を破る農民像を描出。歴史人口学による「新しい歴史」の可能性を提示するもので、単なる人口史ではない。▼松本健一著『国を興すは教育にあり―小林虎三郎と「米百俵」』（四六判上製・一四〇〇円）小林虎三郎の「米百俵」は、師佐久間象山の志を継いだ、開国日本の根本的な国家戦略だった。いまに生きるその戦略の真髄を師象山、同志吉田松陰、ライバル河井継之助との思想的ドラマで生き生きと描く。「米百俵」の原点である虎三郎の代表作『興学私議』の現代語訳を収載。小金井きみ子（森鷗外の妹）の「戊辰のむかしがたり」も収載。



『国を興すは教育にあり』
本体1,400円(税別)

慶應義塾大学出版会

▼飛ヶ谷美穂子著『漱石の源泉―創造への階段』(三二〇〇円) 英文学の投影が色濃い漱石作品と英文学作品との具体的・実証的な比較文学研究。「漱石旧蔵マレデイス作品自筆書入れ翻刻」など、漱石研究にとってきわめて重要な資料も収録。新しい発見に満ちた画期的な論考。

▼山本純一著『インターネットを武器にした「ゲリラ」反グローバリズムとしてのサブテキスト運動』(三八〇〇円) 反グローバルリズムとセルフ・ガバナンスを主張するゲリラの戦略を、メディアと言説分析の視点から検証した新しい地域研究。

▼月刊『教育と医学』創刊50年特別企画「教育と医学の会編『現代人の心の支援シリーズ全5巻』(各一八〇〇円) 1 こころの発達をめぐむ 2 知と感性をそだてる 3 青少年の悩みにこたえる 4 健康と生き方を考える 5 障害のある人を支える 心のケアへのヒント満載。

▼坂本多加雄編『福澤論吉著作集9 丁丑公論 瘠我慢の説』(三〇〇〇円) 第五回配本は、「伝統的なるもの」との関わりのおかげで、一国独立のために、日本人の根本精神を説いた一六著作を収録。

産能大学出版部

▼山下福夫著『経営分析の進め方・活用の仕方』(一八〇〇円)

企業を取り巻く環境はますます厳しさを増しています。しかも世の中が多様化してきている今日、会社全体を計数的に正しくつかみ、その中で何が問題で、何をなすべきかをしっかりと把握して、着実に対応ができればビジネスパーソンにとって、それは強力な武器となるのではないのでしょうか。

そのために、財務数値や経営諸表などを使って、正しい採算計算と適切な意思決定、問題の発見、問題解決のための課題決定、改善の方向づけをすることが不可欠です。

本書は、会社で使われている数字、つまり財務諸表(貸借対照表・損益決算書など)のしくみと読み方、そしてそれを基にした経営分析の進め方・活かし方を、現場での会社指導やセミナー講師を長年務めてきた著者が記したものです。誰にでもわかるよう具体例を盛り込み、数字が苦手な人にも理解できるように、平易に解説されています。

専修大学出版局

▼久重忠夫『非対称の倫理』(三二〇〇円) 他者の心の苦しみを知るということはどういうことだろうか。これまでの倫理学は人間関係を均質で対等な関係として考えてきた。しかし、現実の人間関係は、強者と弱者からなり、容易に他者に危害を与えたり、他者から傷つけられたりする非対称な関係なのである。本書は他者に対する罪悪感という人間の最も暗い領域に光をあてながら、人間の傷つきやすさと非対称性にもとづいた新しい倫理学の構築の試みを行う。

▼中野育男『学校から職業への迷走』(二八〇〇円) フリーター、無業者の増加など若年者の雇用問題に対し、欧米諸国の事例を紹介、雇用保障としての職業教育・訓練制度の整備を提言。



玉川大学出版部

▼谷川俊太郎文・和田誠絵『ともだち』
(二一〇〇円)

「ともだちって かぜがうつっても へいきだって いってくれるひと」——谷川俊太郎の珠玉の詩と、和田誠のほのぼのとした心暖まるイラストによる、幼児〜小学校低学年向き絵本。よい友は一生の宝であり、生きて行くうえで友だちがいかに大切かということ、やさしいことと楽しく絵により、幼児にもわかりやすく語りかける。いまの時代だからこそ、必要な「友」であり、「本」である。「だれだって ひとりぼっちでは いきてゆけない」「わるくちは いったっていい、でも かげぐちを いうのは よくないな」「ともだちって すばらしい」



中央大学出版部

▼トビアス・ヘルムス著／野沢紀雅・遠藤隆幸訳『生物学的出自と親子法—ドイツ法・フランス法の比較法的考察』(二七〇〇円) 生物学的親子関係の確認が親子法系の中でどこまで可能であるかという、親子法の根幹に関わる基本的問題を取り扱っている。

▼深澤俊著『慰めの文学—イギリス小説の愉しみ』(二〇〇〇円) 二〇世紀のイギリス小説を論じることから始め、さらに一八世紀の小説の起源から現代までの流れを追うことによって、市民階級の心の支えを明らかにしようとしている。

▼工藤達朗編『ドイツの憲法裁判—連邦憲法裁判所の組織・手続・権限』(六〇〇〇円) ヨーロッパ大陸型の違憲審査制を代表するドイツの連邦憲法裁判所。本書はドイツの連邦憲法裁判所の全体像を明らかにする日本初の研究書である。

▼藤巻秀樹著『現場に出た経済学者たち』(一九〇〇円) バブル崩壊による日本経済の長期低迷や、相次ぐ不祥事による官僚機構に対する不信任が高まる中、政策決定の現場に進出してきた経済学者たちの思いを描いた人間ドキュメント。

東海大学出版会

▼村山司・中原史生・森恭一編著『イルカ・クジラ学—イルカとクジラの謎に挑む』(二八〇〇円)

遙か太古の昔、陸上の生活を捨て、再び海に戻っていったイルカ・クジラたち。水中を自在に泳ぐのに適した体の構造、光の少ない世界で巧みに使い分ける視覚と聴覚、そして、深く、長い潜水にも耐え得る体の機能。そこには水中生活への移行に伴う実に巧みな進化と適応の過程を見ることが出来る。

イルカ・クジラは、口の中にヒゲ板を持つヒゲクジラ類と歯を持つハクジラ類に大別されるが、この両者の生活ぶりは大きく異なったものだ。親子以外ほとんど群れを作ることのないヒゲクジラ類に対し、数十、数百、時として数千にのぼる群れを作るハクジラ類。彼らはそれぞれに複雑で高度な社会性を持ち、それは様々な行動となって現れる。

本書では、そのように謎と神秘に満ちたイルカ・クジラの世界を、第一線の研究者からその一端を垣間見せてもらうとともに、イルカ・クジラの生態の解明を旨とした最新の研究を紹介する。

東京大学出版会

▼『現代南アジア』（全6巻）刊行開始。

「悠久」のイメージの強いインドをはじめとした南アジア諸国であるが、グローバル化する世界のなかで、この一〇年のあいだに大きな構造変動期をむかえている。インド、パキスタン問題、IT産業の躍進など、国内外の執筆者八〇名が現在の研究水準をしめし、南アジアを基軸とした新しい知の枠組みを構築する。他の地域からの総合的な視点もとりこむ、日本初の体系的シリーズである。

長崎暢子編『①地域研究への招待』／
絵所秀紀編『②経済自由化のゆくえ』／
堀本武功・広瀬崇子編『③民主主義への
とりくみ』／柳澤悠編『④開発と環境』／
小谷江之編『⑤社会・文化・ジェンダ
ー』／秋田茂・水島司編『⑥世界システ
ムとネットワーク』（本体価格四六〇〇
円／四八〇〇円）



東京電機大学出版局

近年、環境に関する国際規格を取得した企業を多く見かける。ISO14000と呼ばれるものがそうで、大学や公共事業での取得事例もあるが、製造業での取得が顕著である。これは、現在のテクノロジが環境を考慮しなければ成り立たないことを示している。また、理工系大学においても環境科学を学ぶ科目が増えている。シラバスを見てみると、単に記憶するのではなく、各個人の環境への関わりや取り組みを考させる内容が多い。これは理工系学生に限らず、重要な知識となることは間違いない。

▼『環境科学の基礎』岡本博司著／一七六頁／一九〇〇円（税別）は、学部初学年を対象としたテキストとして、身近な事例を多く採り上げ、見開き二頁で解説。また、『環境問題へのアプローチ』有田正光編著／一六〇頁一九〇〇円（税別）は、一般読者向けに基礎から各個の地球環境問題、人間との関わりなどについて述べる。さらに『大気圏の環境』二七六頁、『水圏の環境』四二〇頁、『地圏の環境』二八四頁（いずれも有田正光編著）では、これら三圏について詳解している。

東京農業大学出版会

▼『農業労災の予防と補償制度―地域農業の安全管理』三廻部眞己著

農業労働災害についてのとらえ方、考え方を解説。類書なし。テキストに好書
平成一四年一〇月／B5判

三七六頁／本体価格三二〇〇円

▼『インターネットが教える日本人の食卓』東京農大生活科学研究所編

インターネットで寄せられた食材等データを集計、解説したもの。日本人の食のパターンがわかる。家庭の主婦必携。献立に困ったときに役立つヒント満載。
平成一四年一〇月刊／A5判

一八四頁／本体価格一六〇〇円

▼The 1st International Students Summit on Food, Agriculture and Environment in the New Century
東京農業大学編

第一回世界学生サミット「新世紀の食と農と環境を考える」をとりまとめたもの。海外から八大学が参加。新世紀に向けて学生たちの役割を「東京宣言」として世界に発信した。

平成一四年一〇月刊／B6判
三五〇頁／本体価格二〇〇〇円

法政大学出版局

▼陣内秀信・新井勇治編……七六〇〇円
『イスラーム世界の都市空間』

なぜ今、イスラーム世界の都市か……。西欧近代をモデルに、機能性・合理性のみを追求した戦後の街づくりへの反省に立って、シリア、チュニジア、モロッコ、トルコ、イランから中国西域まで、イスラーム世界の迷宮都市を徹底的に調査・検討し、これまで見落とされてきた人間的な秩序と、豊かな生活空間の存在を明らかにする。都市と建築を通して描く「生き方」としてのイスラーム！

▼陣内秀信・岡本哲志編著 四九〇〇円

『水辺から都市を読む』

▼陣内秀信（協力*大坂彰）六三〇〇円
『都市を読む*イタリア』



放送大学教育振興会

▼平成一五年三月刊行予定の放送大学印刷教材九五点（学部用九〇点・大学院用五点）の編集作業は今たけなわ。主任講師・分担執筆者合わせて約三四〇名、編集担当者約五〇名が、資料の収集・原稿執筆、原稿校訂・校正にと、おおわらわの毎日である。

▼放送大学授業科目別受講者数ランキング（平成一四年二学期。カッコ内は受講者概数〓単位百名。外国語を除く）

- ①脳の健康科学(87)、②心理学初歩(87)、③発達障害児の心と行動(84)、④生涯発達心理学(84)、⑤家族と生活ストレス(88)、⑥労働と生活の心理学(88)、⑦カウンセリング概説(84)、⑧知覚心理学(84)、⑨人格心理学(83)、⑩発達と学習(83)、⑪人体の構造と機能(82)、⑫自己を見つめる(80)、⑬障害児教育指導法(19)、⑭食物とからだ(80)、⑮こころの健康科学(19)、⑯現代人のための哲学(19)、⑰年金・医療保険論(19)、⑱医療・社会・倫理(18)、⑲病気の成立と回復促進(18)、⑳簿記入門(18)、㉑世界の住まいと暮らし(18)、㉒障害児教育論(18)、㉓臨床心理学概説(18)、㉔保健体育(18)、㉕がんの健康科学(16)

明星大学出版部

海峽や大渓谷に長大橋梁が架かるのを多く目にするが、これは橋梁関係の材料、理論、製作技術、架設工法などが近代著しく進展したことによる。橋梁の建設は自動車などの重量を支える上部工、その上部工を支える下部工、そして地盤に築造される基礎工からなる。基礎工には土質に関する知識、下部工にはコンクリートの技術、上部工には水門や鉄塔等各構造物の設計ならびに施工への応用と幅広い知識が必要となる。このように鋼道路橋の建設に必要な多くの内容を若い技術者のための学習の書として伊藤満・栗田章光・鈴木博之が編著し、『鋼道路橋の建設・管理』（三三〇〇円）を一九九八年刊行した。同書には、九五年一月の兵庫県南部地震において崩壊した高速道路や橋梁等の悲劇的な惨状から得られた貴重なデータを掲載し、土木関係者以外からも反響があった。この度同じく伊藤満・栗田章光・鈴木博之編著にて日進月歩に進展する鋼道路橋の技術や知識、刊行後新たに得られたデータを盛り込み、『鋼道路橋の建設・管理』改訂版（価格未定）を二〇〇三年三月、刊行予定。

早稲田大学出版部

- ▼『廃棄物経済学をめざして』（中村慎一郎編、早大現代政治経済研究所研究叢書16、四四〇〇円）廃棄物を経済分析の対象に据えた「廃棄物経済学」を追求。
- ▼『現代の宗教と政党―比較のなかのイスラーム』（日本比較政治学会編、同学会年報4号、三四〇〇円）宗教は政党政治の中でどんな働きをしているのか。イスラーム、ユダヤ教などの動向を分析。
- ▼『俳句とハイクの世界』（星野恒彦、四三〇〇円）日本の伝統的な俳句と英語ハイクを取り上げて、テーマ、季語等を比較文学の観点から考察する。
- ▼『アイスランド小史』（G・カールソン、岡沢憲美監訳／小森宏美訳、二四〇〇円）北極圏直下の国アイスランド。その国土の発見から現代までを珍しい写真・図版約80葉を交えて描く。



名古屋大学出版会

- ▼シリーズ現代中国経済「全8巻」開始
第1巻『経済発展と体制移行』中兼和津次著（二八〇〇円）二重の構造転換を通して、めざましい成長をとげる中国経済の全体像を浮き彫りにする。
- 第2巻『農民国家の課題』蔵 善平著（二八〇〇円）経営の実態、都市農村格差、郷鎮企業、食糧自給、農産物貿易など、農業が抱える諸問題を描き出す。
- 第3巻『労働市場の地殻変動』丸川知雄著（二八〇〇円）労働市場の変動は中国経済をどのように変貌させてゆくのか。マクロとミクロの両面から探る。
- ▼野依良治著『研究はみずみずしくーノーベル化学賞の言葉』（二二〇〇円）研究内容を分かりやすく紹介した受賞記念講演を、豊富な図や解説とともに収録。研究成果から教育・社会のあり方、若者へのメッセージまで縦横に語る。
- ▼梶田正巳編『学校教育の心理学』（二八〇〇円）変貌著しい学校教育の現場に焦点を合わせ、学力や心の問題への対応、総合学習の導入など、多様化する教育課題に実践的に応えようと、子どもに生きる力を引き出す支援を考える。

京都大学学術出版会

- ▼『講座・生態人類学（全8巻）』完結（A5判上製・二八〇〇〜三四〇〇円）
①カラハリ狩猟採集民 ②森と人の共存世界 ③アフリカ農耕民の世界 ④遊牧民の世界 ⑤ニューギニア ⑥核としての周辺 ⑦エスノ・サイエンス ⑧ホミニゼーション
生態人類学は、人間社会の生物学的構造を解明するという壮大なテーマのもとに、アフリカや東南アジアをはじめ自然と深く関わって生きる人々を徹底してフィールドワークで追跡し発達してきた。わが国の生態人類学者の成果を網羅した初のシリーズ全8巻が完結する。
- ▼最終配本・第3巻『アフリカ農耕民の世界―その在来性と変容』掛谷誠編・二八〇〇円／アフリカを農業の潜在力・可能性と未来を示す。



大阪経済法科大学出版部

【近刊予定】

▼『マーケティング論―統合管理論的接近』金 元銖(キム・ウォンス) 著／

マーケティングという学問は大きく分けてマーケティング管理が中心になるマイクロマーケティングと流通論及び社会マーケティング論を含むマクロマーケティングの二つの領域がある。本書ではマイクロマーケティングと関連する問題を営利組織体である企業だけでなく、非営利組織体および第3セクターなど全ての行為主体を対象として考察する。

従来、マイクロマーケティングの立場では、市場における販売の問題と認識され、販売管理として体系化されていた。しかし、現代の分業経済体制のもとで、企業はそれが製造企業か流通企業であるかに拘らず、市場での競争を前提に、マーケティング活動を全社的な立場で統合的に遂行しなければならない。

本書では企業を含む組織体においてマーケティング戦略活動を、世界市場をめざして全社的マーケティングとしていかに展開すべきかを統合管理論的立場で考察したものである。

大阪大学出版会

▼岡野祐子著『ブラッセル条約とイン格蘭ド裁判所』六〇〇〇円 国際民事訴訟手続をめぐる国際統一ルールの問題点を浮彫りにし、伝統的ルールから評価。

▼阪大源流の学塾「適塾」特集
梅溪昇・芝哲夫著『よみがえる適塾―適塾記念会50年のあゆみ』二二〇〇円
蘭学塾遺構の継承と公開の足跡をたどる。同塾再建に情熱を捧げた著者が綴る50年。適塾記念会編『適塾アーカイブ―貴重資料52選』七〇〇円 写真資料特選集

▼橋本介三編著『中国開放経済と日本企業』二六八〇円 大連経済技術開発区を舞台に、同国経済発展の礎を築いた外資系企業の実態をマイクロ・データの収集、分析を通して検証する。WTO加盟後の地域開発政策や外資政策を具体的かつ体系的に展望し、21世紀の日中交流を考える上で貴重な情報源となる一冊。現地大連理工学部との共同研究をまとめた力作。

▼大阪大学新世紀セミナー各巻Ⅱ A5判・九六頁・本体一〇〇〇円
・新刊Ⅱ山内直人著『NPOの時代』
・逐次刊Ⅱ杉原薫著『アジア太平洋経済圏の興隆』

関西大学出版部

▼飯田紀彦著『ゆれ動く若者と家族―現代芸術からのメッセージ』(二二〇〇円)
現代の絵画と音楽から示唆されるメッセージを通し、ニーチェ以後の個人と産業革命以後の家族を読み取ると、現代では近代個人観と家族観が消滅しつつあるにもかかわらず、新しい価値観が確立されていないために若者は悩み、家族がゆれ動いていることが分かる。近未来に我々は何をなすべきかを問いかける。

▼長谷川存古著『語用論と英語の進行形』(二七〇〇円)「行為解説の進行形」は、進行形についての研究史の中でも等閑視されてきた。本書は「発語行為論」を中心に語用論を概観し、その後、語用論の視点からは重要な意味を持つ「行為解説の進行形」にメスを入れようと試みる。
▼山本英一著『順序づけ』と「なぞり」の意味論・語用論(三三〇〇円) 英語の表現や言外の意味が生成されるメカニズムを新たな切り口から解き明かす。類似表現におけるニュアンスの違い、二重目的語構文や共感覚表現使用の背後に潜む認知的制約・原理について論じるとともに、笑いをもたらす談話にも言及する。

九州大学出版会

- ▼ジャン・パウル／恒吉法海訳『彗星』（A5判・五一四頁・七六〇〇円）ジャン・パウルの最後の長編小説。その喜劇的構成は『ドン・キホーテ』を淵源とし、『詐欺師フェリクス・クルル』につながるもので、主人公の聖人かと思えばそうでもない、侯爵かと思えばそうでもない、二重の内面の錯誤の劇が描かれる。
- ▼武継平著『異文化のなかの郭沫若―日本留学の時代』（A5判・四三二頁・七〇〇〇円）彼の留学事情及び文学創作環境の事実検証を主軸に、現代中国の代表的な文学者にまで成長した過程と、若き詩人郭沫若の真実の人間像を解明。
- ▼松本直子著『認知考古学の理論と実践的研究』（B5判・二六四頁・七〇〇〇円、二〇〇〇年二月初版、二〇〇二年三月2刷）今秋、第九回雄山閣考古学賞特別賞を受賞。
- ▼ジャン・マビヨン／宮松浩憲訳『ヨーロッパ中世古文学』（B5判・七六二頁・一四〇〇〇円、二〇〇〇年二月初版、二〇〇二年四月2刷）二〇〇〇年第三三回日本翻訳出版文化賞、今秋第三回ゲスナー賞「本の本」部門銀賞を受賞。

東北大学出版会

- ▼沼田裕之著『教育の条件―人間・時間・言葉』（A5判・一七五頁・一五〇〇円）教育を成り立たせている根本的条件とは何か。欧米と日本の教育に大きな差は無いという前提に立って、明治以来、日本人は欧米の教育を取り入れてきた。著者は、そうではなくそれぞれの文化が教育の考え方や、在り方を規定すると考える。時間のとらえ方や、意思伝達における言葉の役割、人間と環境との関わり方における考え方の相違が教育の根本的条件に影響を及ぼしているとする。
- ▼田中英道監修『西洋美術への招待』（A5判・二九七頁・一九〇五円）西洋美術とは何だろうか？ 西洋美術史を学ぶ意義はどこにあるのだろうか？ こうした問いに著者達は真摯に取り組んで本書を執筆した。本書は、西洋美術の単なる啓蒙や紹介ではなく、ソフトな語り口から西洋美術と東洋美術の深い関係の一端が明らかにされる。西洋美術ファン待望のチチエローネ！ カラー写真をふんだんに折り込んだ本書のコストパフォーマンスは、東北大学出版会の意気込みによる大サービスで可能となった。

流通経済大学出版会

- ▼流通経済大学経済学部教授・原宗子編『流通経済大学・天野元之助文庫』天野元之助博士（一九〇一―八〇年）は中国農業史研究の第一人者であり、満鉄調査部で中国農村を实地調査、「満鉄事件」後、対象を古農書に移した研究を戦後も中国で継続、帰国後は京大、大阪市立大、追手門学院大等を歴任された。中国農業史の全領域で貴重な論著を残され国際研究交流にも尽力された。『中国農業史研究』（お茶の水書房）で学士院賞受賞、『中国古農書考』（龍溪書舎）は日中国交回復記念事業出版である。
- 博士の旧蔵書は京都大学東南アジア研究センターに寄託され、同センターの整理を経た九五年、一部ご遺族に戻され、〇一年残る多くが古書店に払い下げられた。随所に真摯な姿勢を示す書込みが見え、一つの学問のカタチを示す重要資料だといえよう。
- 本学図書館では、これを散逸させることなく、また博士の足跡を検証しつつ継承するよすがとすべく一括購入し、HPで公開して既に内外で利用されている。

三重大学出版会

▼Peter Short: An Elizabethan Printer, A5判・二三〇頁 山田明広(信州大学名誉教授) 定価五七五〇円。

本書はシェイクスピア作品およびシェイクスピア時代の楽譜などを世に送り出した同時時代の印刷業者ピーター・ショートに関する研究書である。英米においても類書の無い、本格的総合研究で、文学・芸術をはじめ、広く文化的な知見にも富んでいる。

ショートの生涯を浮き彫りにした古記録にもとづく伝記、ショートが関係した印刷物の総目録、そのすべてを点検し定量分析した年度別生産の実態および同業者との共同印刷の実態に関する考察など、いずれも最先端の研究である。

本書のほぼ半分を占める第五章は、ショートが所有したすべての装飾活字およびメント、それに相当数の木版などを加えた膨大なコレクションの記録と複製であり、いずれも世界初公開である。

著者はこの領域の開拓者であり、数年前に発表された印刷者トマス・クリードに関する類似の総合研究は高い評価を受けている。

関西学院大学出版会

近刊

▼田村和彦著『魔法の山に登る—トーマス・マンと身体—』

(四六上製・三〇〇頁・予価二九〇〇円)

▼アルマティア・セン著 細見和志訳『アイデンティティと理性』

(四六並製・一〇五頁・予価一八〇〇円)

▼天野明弘著『環境問題の考え方』

(四六並製・二〇〇頁・予価二二〇〇円)

既刊

▼山路勝彦・田中雅一編『植民地主義と人類学』(A5上製・六〇〇頁・一八〇〇〇円)

第一部 人類学と植民地の記述

第二部 統治政策と技法

第三部 植民地化とジェンダー

第四部 文化の創出と展示

第五部 ポスト・コロニアリズムの表象と葛藤

ウェブサイト委員会ニュース <http://www.ajup-net.com/>



〈書籍の表示価格は税別です〉

▼大学出版部協会のウェブサイトは、大学出版部協会の最新のニュースを伝えています。毎月、二十日あたりで更新しています。「新刊速報」「大学出版部ニュース」にご注目ください。▼このサイトは、大学出版部協会で選出された運営委員と各出版部から選ばれた連絡委員により内容が検討されています。ウェブサイトも開設されてから四年を経過し、ますます大学出版部協会の広報の機能を果たすとともに、さらにウェブサイトの可能性を追求する実験をさまざまに検討しています。▼ご意見・ご要望はmail@ajup-net.com宛にお願いたします。

■今、「職人」が注目されているようだ。バブルの時代に「ものづくり」を軽視した反動なのだろうか。それとも、身の回りから職人らしい職人が消えてしまったことによる感傷的な反応なのか。確かに、住宅建設の現場でも、働いているのは職人というよりはむしろ、あらかじめ工場で裁断された部材の組立工に近く、見ていて面白くない。

■ましてやデジタルの世界となれば、「技術者」はいても「職人」は存在しないと考えるのが一般的な認識だろう。組版の現場でも、活版時代の「職人」の多くはリタイアし、専門学校やDTPスクールで学んだ「オペレーター」たちが取って代わった。彼らを「職人」とは言い難い。なぜなら良い意味での「職人」という言葉には、自分の仕事に妥協しない頑固さといった性格的な意味に加え、伝統的な「技」の継承という条件が言外に含まれているからだ。「技」を継承するには、技術革新の生み出した溝はあまりにも深かったと言える。

■しかし、それはあくまでも一般論だ。コンピュータも、所詮は道具にすぎない。大工の鉋、左官屋の鏝、植木屋の鋏と変わるものではない。どんな時代にも職人氣質、職人魂を持った人たちは存在するはずだし、どんなに若くても、経験が浅くても、温故知新を実践している人たちはいるだろう。そういう人たちが存在する以上、デジタルの世界にも「職人」は生まれ得る。

■ある日、ネットサーフィンをしていて、以前、この欄でも紹介したことのある鈴木努氏が創業したフォント制作会社・字工房のウェブマガジン「文字

マガ」に出合った。巻頭には連載インタビュー「文字の巨人たち」が掲載されている (<http://www.jiyu-kobo.co.jp/webpage/mnm/mojinaga.html>)。

■第一回は橋本和夫氏。橋本氏は活版の活字製作会社モトヤを経て、写研で石井宋朝体の制作にたずさわり、本蘭明朝体の監修および仮名のデザインを担当されたという。

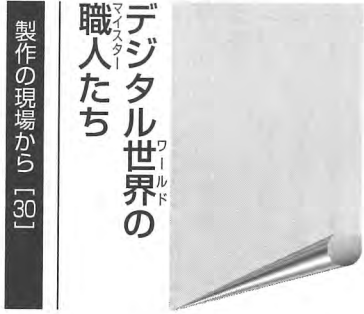
■第二回は小塚昌彦氏。小塚氏は毎日新聞の活字母型の制作を皮切りに、同社のCTSフォントのデザイン開発を担当し、モリサワを経て、アドビシステムズで小塚明朝・小塚ゴシックを開発された方である。

■どちらも活版の時代にスタートしながら、デジタルフォントの世界でも一家をなした方々である。とりわけ明朝体という、伝統的な文字の改良に大きな役割を果たされた。オフセット適性を考慮した本蘭明朝は写研の本文書体として定番の位置を占めているし、毎日新聞明朝もファンは多い。小塚明朝も好き嫌いはあるにせよ、デジタル時代

の明朝はどうかあるべきかという一つの提言であることは間違いない。お二方が「職人」と呼ばれるのを良しとするかどうかはわからないが、明朝体という伝統を継承し保持しながら、細部の一点一画にこだわり、時代と技術の変化を取り入れて改良する地味で根気のいる作業は、本物の「職人」でなければできないことではないと思うのである。

■さて、このコラムもいささかマンネリになつてきた。そろそろ若い人にバトンタッチしたいと思う。たかだか三十回とはいえ、期間は丸々十一年に及んだ。この間、製作の技術と道具は革命的な変化を遂げた。もともと作文嫌いの僕が何とかこのコラムを書き続けられたのは、新しい技術に対して、知識も理解力も持たないながら、興味だけは持ち続けられたおかげである。これからも、好奇心だけは失いたくないと思っている。

■愛読してくださった皆さん、ありがとうございました。
(法政大学出版局・秋田公士)



デジタル世界の職人たち

製作の現場から [83]

デジタル出版は 読者の中に



■大山が初冠雪となった10月27日、大山緑陰シンポジウムが鳥取県の国民文化祭にあわせて開催された。96年から5年間、オフシーズンのスキー場ホテルを借り切り、本に関心を持つ人々が集い昼夜語りあう同シンポは、参加した人たちの共通の財産となつている。今年はかつてシンポに参加した若い出版人が実行委員会の中心となり、大山町の全面的な協力を得て開催された。

■事前申込みが低調で当初心配されたが、結果的には過去最高の参加者を記録する盛況となつた。参加者の中で「大山は本の聖地」という言葉が交わされたが、初めて参加した僕にとつても貴重な1日となつた。

■「なぜ、今さら電子出版なのでしょうか？」シンポの電子出版分科会をコーディネートすることに決まればかりのことである。過去の大山シンポで常連の編集者にこう問われた。

■「昨年から続いていたアメリカのeブックブームが実態を伴わないまま失速したが、このような電子出版不況を嘆いての愚

痴では、もちろん、ない。

■すでに電子出版は出版活動の基盤要素ではないか、分科会として電子出版を単独で括る理由があるのか、というのである。確かに流通を議論するのにオンライン書店は不可欠であり、それは他の分科会でも同様である。大山シンポがスタートした時期と大きく異なり、電子出版は「電子」という冠を外して出版の隅々に溶け込んでいる。分科会が役割を終えるときは、それが電子出版の成熟を意味する。

■確かに電子出版分科会の参加登録者数は少なかつたが、それは人々が「成熟」を認めたわけ

ではない。出版社にとつて「電子出版は儲からないビジネス」と誤解されているからだ。でも電子出版は停滞してはいない。僕は分科会のコーディネートとして次の案内文を書いた。

■90年代の出版界は、出版革命あるいはビジネスチャンスとして、大きな期待を電子出版に寄せてきました。その結果、「21世紀の出版」として語られた輝かしい可能性や巨大市場は、いまだ達成されない夢と思われがちです。しかし、改めて20世紀末の出版を振り返ってみると、

電子化による劇的な変化があります。百科事典はマルチメディア化して優れた検索性を手に入れました。電子辞書が多くの読者を獲得しています。専門雑誌のデータベースは教育教材に不可欠となつており、学術電子ジャーナルは国際的な潮流です。地図はどうでしょうか。デジタル化され、カーナビという大きなマーケットにつながりました。

■分科会では、電子辞書をめぐつて出版社、取次、書店の間でときに激しいやりとりが交わさ

れた。それは「次の大山シンポでは、小説のコンテンツでも議論を交わしたい」とeブック製作会社が羨む光景でもあった。僕の想像を越えて電子辞書は若い人たちの間に浸透している。

■出版人が反発したり戸惑っているうちに、電子出版はすでに読者の手の中にある。ネット社会が成熟し、無料コンテンツが溢れても編集者の役割は変わらずある。ただ、読者が何を求め、どのようなメディアで何を読むのだろうか、注目していきたい。

■さて、『大学出版』を巻末から読ませるといわれた名コラム「製作の現場から」が終了する。数々の迷ネームを駆使して連載されてきたコラムは、アナログからデジタルまで、まさに職人的技に富む面白さだった。読者として楽しんでいただけでなく、便乗して左ページに書かせていただいたが、一緒に引退して次の企画に譲りたい。いつの日かeブック版で復活するのもしよい。それまでさようなら。

(東京電機大学出版局・植村八潮)

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会

060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

聖学院大学出版会

362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

麗澤大学出版会

277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3331 FAX 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会

108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3454-7029

産能大学出版部

158-0082 世田谷区等々力6-37-12
TEL 03-5760-7801 FAX 03-5760-7804

専修大学出版局

101-0051 千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

玉川大学出版部

194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部

192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

東海大学出版会

151-0063 浜谷区富ヶ谷2-28-4 東海大学校舎内
TEL 03-5478-0891 FAX 03-5478-0870

東京大学出版会

113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局

101-8457 千代田区神田錦町2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会

156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

法政大学出版局

102-0073 千代田区九段北3-2-7
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

放送大学教育振興会

105-0001 港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F
TEL 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482

明星大学出版部

191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

早稲田大学出版部

169-0071 新宿区戸塚町1-104-25
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

名古屋大学出版会

464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

京都大学学術出版会

606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部

581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

大阪大学出版会

565-0871 吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

関西大学出版部

564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

九州大学出版会

812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172

東北大学出版会 (準会員)

980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

流通経済大学出版会 (準会員)

301-8555 龍ヶ崎市内平畑120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

三重大学出版会 (準会員)

514-8507 津市浜町1515 三重大学出版ホー儿内
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

関西学院大学出版会 (準会員)

662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-5233 (内線3475) FAX 0798-53-9592